

日本川崎病研究センターニュースレター

(No.10) 2005.8.1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

緒言 川崎富作

暑中お伺い申し上げます。

今回のニュースレターは福岡市立こども病院の福重淳一郎先生と朝日新聞の田辺功氏のお二人から玉稿をいただきました。

福重先生は臨床の立場から、田辺氏は医学ジャーナリストの立場から 30 年以上に亘り川崎病に深い関心を持ちつづけてこられた篤学の士でありお二人共正会員として当センターの運営にご協力をいただいております。

さて、1970 年以来ほぼ 2 年に 1 度ずつ実施されて来た川崎病の全国調査が、途中幾度かの紆余曲折を経て、自治医大中村好一教授を中心に第 18 回全国調査（2003 年と 2004 年の 2 年間）が現在行なわれている事は大変喜ばしい事です。最近の中間報告では 2003 年も 2004 年も共に 9,000 例を超えている由です。つまり、本症は年々漸増していて、一向に減少傾向がみられないばかりか、年間 1 万人の発生も時間の問題といえましょう。問題は原因を早く解明して一刻も早く予防法を確立することです。

本年 2 月サンディエゴで第 8 回国際川崎病シンポジウムが開かれた際、エール大学から新しいコロナウイルス HCOV・NH* が川崎病と関係がありそうであるとの報告があり、久し振りに国際的に川崎病病因論が注目されました。すなわち、エール大学の Esper らが川崎病患者 11 例中 8 例の呼吸器分泌物から HCOV-NH が分

子生物学的手法で陽性であったのに、性・年齢を一致させた対照群では 22 例中 1 例のみが陽性であったと発表したのです(J.Inf.Dis.2005)。これらのデータから「HCOV-NH 感染が川崎病の発症に関係していることを示唆している。」というものでした。しかし、新しいウイルスが分離されたとの発表ではありません。

今までの疫学調査では川崎病はごくありふれた (ubiquitous) 感染因子が引き金になっている可能性が示唆されてきましたのでコロナウイルスならその条件に合致すると云えましょう。

当センターではこの新しいコロナウイルス**の問題を 2 月の川崎病シンポジウムの直前に知りましたので、その後わが国唯一のコロナウイルス研究者田口文広先生（国立感染症研究所村山分室）に日赤医療センター小児科の今田義夫先生との共同研究を依頼し、川崎病保存血清の抗体価等を検索中です。もし、有意義な結果が出たら、更に追求しようと考えています。

しかし、現在までの追試の結果は否定的なものが多く、別な視点から病因を見直す必要もありそうです。(当センター理事長)

(*Human Corona Virus-New Haven の略)

(**コロナウイルスはカゼ症候群の原因ウイルスの一種と考えられて来ましたが、香港で流行した SARS の原因がコロナウイルスと判ってこのウイルスが見直されました。)

「皆で重い扉を押し開きましょう」

福重淳一郎

敬愛する川崎先生から何か一筆とのお言葉を頂き、僭越を省みずこの一文を寄せる次第です。

大学紛争後の昭和 40 年代半ばに大学病院で小児科医として歩み始めました。九州でも川崎病が認知され始めた頃でしたが、大学では急性期例に遭遇することも少なく、やはり稀な疾患でした。記憶に残っているのは、循環器研究室で直接指導して頂いた広瀬瑞夫先生（佐賀市ご開業）が、医学のあゆみ（1974；91）、日本小児科学会雑誌（1975；79 卷 2 号）に報告された「急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群による僧帽弁閉鎖不全（MCLS 弁膜症）」の例です。僧帽弁閉鎖不全の 8 歳男児で、当時ですからリウマチ性心臓病としてペニシリンの予防投与中でした。しかし、胸部 X 線撮影で心陰影に重なって石灰化像が認められ、病歴上、11 生月（昭和 41 年 10 月）に高熱が 20 日間位持続し、口唇の乾燥亀裂、全身の多形紅斑、手足の膜様落屑があったということでしたし、血管造影で左冠動脈の走行に一致して器質化した大きな動脈瘤が 3 個、さらに右上腕動脈の一部に動脈瘤様の拡張が発見されるに至り、診断は僧帽弁閉鎖不全（MCLS 後遺症）と変更されたのでした。この例は後にバイパス手術を受けられたのでした。

昭和 51 年からテキサス小児病院循環器科で臨床を始めましたが、誰に尋ねても川崎病急性期例の経験は皆無でした。今もご活躍中の Dr. Nihill と診療録、剖検記録等から症例を掘り起こしてみることにになりました。その結果、1959 年からの 20 年間に 8 例（男児 4 例、女児 4 例、うち剖検 3 例）の川崎病例が確認されました（Am J Cardiol 45:98-107 1980）。基幹施設ですから

重症の紹介例が多く 6 例が心筋梗塞を来たしており、半数が突然死例でしたが、米国でも以前から臨床例があることが推察された訳です。

昭和 54 年に帰国して川崎病例の多さに驚かされ、これが感染症でなくてなんだろうか？と思ったものでした。記憶に残っているのは高熱が 1 か月以上も続いた 5 生月の男児で、腋下部に拍動性の瘤を触れたのも初めての経験でした。結局、巨大左冠動脈瘤を残し、その後完全閉塞、10 歳過ぎからは胸痛を訴えるようになり 20 歳前に両内胸動脈、胃大網動脈を利用したバイパス手術を受けたのでした。

2 度目の米国生活は平成元年でしたが、やはり米国では川崎病の症例は決して多くはないことを再認識しました。

以上のような次第で川崎病の臨床・研究では末席を汚していますが、現職場には毎年 70～80 名余りの川崎病のこども達が入院しています。しかし、未だに原因不明ではお子さんをお持ちの方々の心配は募るばかりです。思いは皆同じで、一日も早く病因が明らかになることですが、症例の少ない米国の方が研究費も潤沢となると心底気落ちしてしまいます。しかし、それでは癪ですから発奮し、知恵を出し合って着実な歩みを進めたいものです。皆で力を合わせて重い扉を押し開きましょう。（福岡市立こども病院・感染症センター院長）



ニュースレターNo.10をお届けいたします。
ご意見ご感想をお寄せください。

川崎病との30余年

田辺 功

私が新聞記者になったのは68年4月。最初の任地が岡山と聞き、そんな遠い所、と驚きました。いつでも辞めれるからと我慢して赴任したことが、臨床医学を専門にし、川崎病に関心を抱く結果になりました。

国立岡山病院小児科部長の山内逸郎先生に出会ったからです。私の全国版の最初の特ダネはその6月、日本で最小の未熟児（685グラム）が無事退院したニュースでした。山内先生の未熟児、新生児医療にかけた情熱は感動的で、私はそれ以来、臨床医の活動を支援しています。

2年間に何度も通い、小児科のいろいろな話を聞きましたが、その一つが川崎病という不思議な病気と、発見した変わり者の先生のことです。いつも一緒だった助手役の五十嵐郁子先生は日赤医療センターで川崎先生の下で働いておられたから、エピソードは山のようにありました。

奈良支局、大阪本社学芸部を経て、私が東京本社科学部に上がったのは76年12月。学芸部でも医療担当でしたし、小さな記事も書きましたが、「あこがれ」の川崎先生に会い、本格的に川崎病に取り組むのはこの時からです。時々、日赤医療センターにでかけ、川崎先生や若い先生方、なぜかいらした重松逸造先生らと原因を論じたものです。

そのうち、川崎病の患者はどんどん増えていきました。そして82年は空前の大流行。野戦病院のような現場、日本心臓財団の木谷道宣さんと組んで国民から研究費を寄付してもらおうという原因究明委員会、浅井満さん

らの親の会の立ち上げと、この年、私はほとんど川崎病専門記者でした。

「原因不明」「突然死がある」と聞いて親はパニックだし、医師は説明する暇もない。原因究明委員会の事務方だった浅井利夫さんと、初めての解説書作りをしました。

50余ページのコンパクトな「川崎病がわかる本」が朝日新聞厚生文化事業団から出たのは翌年1月です。浅井さんとは「原因が分かったら普通の本にしよう」と、あくまで原因不明時期の仮本のつもりが、改定と増補を繰り返して22年も出続けているのは、本当に予想外のことです。

親に子どもの病気を正しく知ってもらい、不安がらずに対応してもらうのがもちろん、この冊子の一番大きな狙いです。実はそれ以外に私は、若い医師や研究者がこの病気に関心を持つようにしたいと考えました。原因解明のヒントになるよう、研究の歴史や年表、患者数や都道府県発生率などをあえて加えたのもそのためです。

患者の一番多い日本で、早晩、だれかが原因を突き止めるはず。そして、私が大発見を世界に発信する予定でした。これだけ難航した病気の原因となると、医学界を驚かせる新規メカニズムがあり、発見者は川崎先生とともにノーベル賞、となれば、授賞式の取材も必要です。

私の不徳の致すところ、こうした想定からはもう10年以上も遅れています。

(朝日新聞編集委員)



事務局から

【センター日報】

- 平成 17 年 5 月 13 日 平成 17 年度第 1 回理事会開催 6:00pm～（於:当センター）
平成 17 年 6 月 4 日 平成 17 年度第 2 回理事会開催 12:30pm～（於:東京 YWCA）
平成 17 年 6 月 4 日 平成 17 年度総会と研究報告会および懇親会開催（於:東京 YWCA）1:00pm
各年度の事業報告及び会計報告、次年度の事業計画及び予算計画は総会議事録と共に
当センターでいつでも閲覧できますので、お気軽にお立ち寄りください。
平成 17 年 10 月 21 日 平成 17 年度（財）生存科学研究所川崎病研究会・平成 17 年度第 3 回
特定非営利活動法人日本川崎病研究センター理事会合同会議開催予定（於:生存科学研究所）5:00pm
平成 18 年 3 月 10 日 平成 17 年度第 4 回理事会開催予定

【特定非営利活動法人日本川崎病研究センター会員数 276】平成 17 年 7 月末現在

[正会員：109 名、2 法人、4 任意団体]：[賛助会員：157 名、3 法人、1 任意団体]

【研究会・講演会】

- ★ 第 6 回北海道川崎病研究会 平成 17 年 9 月 10 日（土）（於:札幌市）
代表世話人:濱田勇(手稲溪仁会病院小児科部長)
- ★ 第 25 回日本川崎病研究会 平成 17 年 10 月 14-15 日（金・土）（於:日大講堂・東京都）
会長:鈴木淳子（東京通信病院小児科医長）
- ★ 第 17 回関東川崎病研究会 平成 17 年 11 月 26 日（土）（於:日赤医療センター）
代表世話人:菌部友良（日赤医療センター小児科部長）
- ★ 第 30 回近畿川崎病研究会 平成 18 年 3 月 4 日（土）（於:テイジンホール・大阪市）
会長:吉林宗夫（近畿大学奈良病院小児科教授）
- ★ 第 26 回東海川崎病研究会 平成 18 年 6 月 10 日（土）14 時～（於:名古屋市医師会館
6 階講堂） 当番世話人:畑忠善（藤田保健衛生大学小児科）
- ★ 「川崎病の子供を持つ親の会」
問い合わせ先：「川崎病の子供を持つ親の会」事務局 Tel:044-977-8451

新会員募集にご協力ください!!!

正会員 年会費 20,000 円

賛助会員 年会費 5,000 円

【川崎病に関するご相談】

当センターでは、川崎富作理事長が川崎病に関するご相談を受けております(無料)。お電話お手紙、Fax 等でご相談をお寄せください。(月曜日～金曜日但し：木曜日を除く：午後 2 時～午後 4 時)

特定非営利活動法人日本川崎病研究センター
〒101-041 東京都千代田区神田須田町 1-1-1 久保キクビル 6 階
Tel:03-5256-1121 Fax:03-5256-1124

日本川崎病研究センターニュースレター

(No.1) 2001.1.1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター